

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2015年2月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：

日本語教室における意味世界の協働構築とコミュニティの創造  
—日本語学習者の相互行為と認識の変容を通して—

申請者氏名：寅丸 真澄

主査 蒲谷 宏

署名

蒲谷 宏



(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 小宮 千鶴子

署名

小宮 千鶴子



(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 宮崎 里司

署名

宮崎 里司



(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

本学位申請論文（以下、「本論文」とする）は、「意味のある授業とは何か」という学習者からの問いかけを切っ掛けとして、その答えを明らかにすべく、「意味のある授業」について理論的に考察するとともに、実践研究を重ねた論考である。

本論文では、

(1) 日本語教室におけることばの学びとは何か。

(2) (1) の学びを目指す日本語教室ではどのような実践が行われるべきか。

という二つの課題を立て、(1) については、理論的考察によって、(2) については、その理論的考察を踏まえた実践に関する研究によって、明らかにすることを目指している。

本論文の構成および各章の概要は、以下の通りである。

## 第Ⅰ章 本研究の目的と課題

研究の目的、課題、本論文の構成、データの表記と記述に関して述べている。

## 第Ⅱ章 日本語教室という場

まず、学習者の自己形成や自己実現を支える日本語教育とは、他者と日本語による記号的意味世界と存在的意味世界を協働構築し、自己の認識を深化、拡大させると同時に、他者との関係性を築き、それによって教室コミュニティを創造していけるようなことばの教育だ、としている。そして、従来の実践に見られる日本語教室観の歴史的変遷について、『日本語教育』創刊号から 157 号に掲載された実践研究論文 163 本について分析し、言語形式習得の場という第 1 の教室観、言語技能獲得の場という第 2 の教室観、人間形成の場という第 3 の教室観に区分した上で、本論文の二つ目の課題に答えるため、第 3 の教育観に基づく実践と実践研究を行うとしている。

## 第Ⅲ章 教室設計と教師の役割

まず、第Ⅱ章の理論に基づき行った実践「考えるための日本語 5」（以下、「RC5」と略す）の教室設計と教師の役割を分析、考察している。その結果、教室設計の特徴として、①教室活動の前提としての「宛名性」と「他者性」、②存在的意味を開示する権利と義務、③「問い」と「応答」による記号的意味と存在的意味の協働構築、④主体

性と自律性を育む公平な役割システム、⑤意味構築と公平な役割システムを実現する「居場所」としての「場」、⑥社会的文化的文脈とアイデンティティを縫り合わせた結節点の創造という6点を示し、さらに教室運営の特徴として、①主体性と自律性の担保、②公平性の担保、③時間と場の担保、④応答義務の徹底、⑤「居場所」の担保、⑥省察の促進という6点を示している。

次に、相互行為分析の前提として、「話段」の概念を参考に、教室活動の話し合いの話題提供者と話題から、5名それぞれの「学習者の場」と「教師の場」、「全体の場」とから成る七つの「場」に区分し、さらに、日本語教室における教師の役割について分析し、学習者の自己形成や自己実現を射程に入れた、学習者の主体性を重視する日本語教育においても、言語形式や言語技能を重視する教室と同様に、教師が重要な役割を果たしていることを指摘している。

#### 第IV章 教室活動における相互行為

本章では、RC5における相互行為を可視化するため、教室談話の相互行為分析を行っている。まず、話題の連鎖の記号的分析から、第3の教室観に基づく教室活動の話題には、第1、第2の教室観に基づく教育活動と異なる機能があることを指摘し、次に、話題の連関の記号的分析、そして、教室活動において生成されたことばについて存在的分析を行うことで、学習者が生成されたことばを内化させると同時に教室全体で共有していたこと、そのためには、活動参加者の自他に対する問いと応答の促進、相互行為に対する可變的、縦斷的な視点が重要であることを示している。

#### 第V章 変容する学習者と教室コミュニティ

本章では、RC5における相互行為の中で、学習者と教室全体が変容していったことを明らかにしている。認識の変容は、学習者の自己形成や自己実現を射程に入れた日本語教室の一つの到達点として捉えられている。

また、「全体の場」で行われた評価活動の経緯を詳細に分析し、教室コミュニティが創造された過程を明らかにしている。

#### 第VI章 結論と今後の課題

日本語学習者は、日本語教室において、ことばの記号的意味世界と存在的意味世界

を他者と協働構築するという相互行為を行うことによって、自己認識、他者認識、社会認識を変容させ、人間関係を構築し、教室コミュニティを創造していく。その過程こそが自己形成と自己実現の過程であり、日本語の学びの過程である、と結論づけられている。

今後の課題としては、他の事例の検証、多様な事例からの考察、第3の教室観に基づく日本語教室の具体的なありようを多角的な観点から明らかにすること、活動内容の異なる実践における検討などが挙げられている。

本論文について、評価できる点として、以下のようなことが挙げられる。

(1) 先行研究を十分に検討し、「学習者の自己形成や自己実現を射程に入れた日本語教室」の重要性を理論的に主張している。

(2) 日本語教室におけることばの学びを記号的意味世界と存在的意味世界の協働構築と規定することで、いずれか一方に偏ることがない。

(3) 「学習者の自己形成や自己実現を射程に入れた日本語教室」を独自に設計・運営し、学習者間の相互行為をデータの分析を通じて実証的に明らかにした。

(4) 学習者の自己形成や自己実現を射程に入れた日本語教育の実践例を示した。

(5) 日本語教室におけることばの学びや、その学びを目指す日本語教室における実践を主課題に、理論的、実証的に検証しており、学会誌『日本語教育』に掲載された関連論文の丁寧な精査は、基本的な文献のクリティカルレビューの手続きを踏まえている。

(6) 教室実践は際限のない問いと応答の連鎖から生まれるという指摘は、教室内での「相互行為の質」を担保する上で、重要な日本語教育観ならびに日本語教室設計観を提示している。

(7) 問題意識、課題設定も明確であり、それを明らかにするための調査方法も適切なものだといえる。また、分析、考察も的確であり、記述も極めて論理的に展開している。

本論文について、課題となる点は、以下のとおりである。

(1) 申請者が様々に管理できる教室である RC5 での実践において、学習者の自己形成や自己実現に寄与する「意味のある授業」分析を行ったと捉えられるが、そうした、先行研究を超えた相互行為を促す申請者の実践以外で、「考えさせる授業」「意味のある授業」はどのように現れ、生起するのであろうか。特定のクラス運営でのみ、「専有」(アプロプリエーション) が実現できるような教室活動が設計、運営できると捉えられないためにも、その汎用性についてのさらなる考察が望まれる。

(2) 学習者の自己形成や自己実現を射程に入れた日本語教室の設計を考える上で、「社会文化的文脈とアイデンティティを縫い合せた結節点の創造」が重要とあるが、本研究は、日本語教室コミュニティに限定し、それ以外はデザインされていない。このことから、特定の居場所を切り取った検証ではないかという問いかけに対し、申請者の教育観を基に、より深く論究してほしかった。

(3) 学習とは、知能や技能を個人が習得することではなく、実践共同体への参加（いわゆる正統的周辺参加）を通して得られる、技能と知識、周りの外部環境との学習者との関係、学習者自身の自己理解（内部環境）における変化や過程であると判断されるが、学習を「個人の営み」ではなく、「社会的な営み」として捉え直す社会的構成主義的な観点から教室コミュニティを考察する試みが、今後の発展研究につながると思われる。

(4) 公開審査会において、申請者は総合教科書を用いて指導する従来型の日本語クラスにも学習者間に相互行為が見られると述べた。そうであれば、学習者の自己形成や自己実現を射程に入れた日本語教育の実践が広まるには、それを従来型のクラスにどのように取り入れればよいかを具体的に示す必要があるのではないか。

以上のような課題は残されているが、総合的に判断し、本論文は、日本語教育学の  
博士学位を授与するに相応しい論考であると判断するものである。

以 上